

熊本地域出土鎭留短甲の検討

編年的位置付けと配布の背景

A Study of *Byōdome Tankō* Armor Unearthed in Kumamoto :
Chronological Placement and Distribution

西嶋剛広

NISHIJIMA Takahiro

はじめに

①熊本地域出土鎭留短甲の検討と編年的位置付け

②熊本県地域における鎭留甲冑出土古墳の様相

③熊本地域における鎭留甲冑配布の背景

まとめ

[論文要旨]

古墳時代中期において鉄製甲冑は、古墳副葬品中で主要な位置を占める文物の一つである。その生産と配布にはヤマト政権と地域勢力との社会的、政治的関係が反映されていると考えられている。

マロ塚古墳が所在する熊本地域には、現在23基の甲冑出土古墳が確認されているが、これらの甲冑に関してはこれまで検討がなされることは少なかった。そこで本稿ではまず熊本地域における甲冑出土古墳の中でも数が多く、マロ塚古墳出土品も含まれる鎭留短甲の編年的位置付けを試みた。その結果、熊本地域から出土した鎭留短甲のほとんどが古墳時代中期後葉に位置付けられた。

そして、熊本地域における甲冑出土古墳の様相を把握するため、甲冑出土古墳の分布、墳形規模、甲冑の出土数について検討し、甲冑出土古墳は菊池川下流域、合志川流域、緑川流域、天草北部島嶼域などの地域に偏在することや、同時期の九州の中でも甲冑が集積する地域の一つであることが明らかになった。その後、熊本地域における古墳時代中期の甲冑集積の背景を理解するため、大型古墳築造、埴輪、渡来系文物という3つの要素を取り上げ、その様相を検討した。この検討結果と甲冑出土古墳の様相との比較をおこない、熊本地域へ甲冑が多くもたらされたことの背景について考察した。

その結果、熊本地域に多くの甲冑が配布された背景には、地域とヤマト政権との多様な関係性を見出すことができた。また、甲冑出土古墳を通してみた古墳時代中期の熊本地域の様相からは、渡来系の新技術を用いた内的発展と朝鮮半島との対外活動という2つのキーワードを見出すことができた。これは熊本地域のみならず、当該時期の日本列島の様相を考える上でも重要なキーワードであると考えられる。

【キーワード】古墳時代中期、熊本地域、甲冑、内的発展と対外交渉